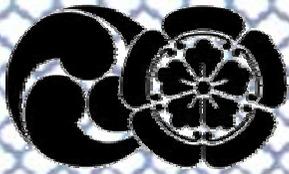


女衆



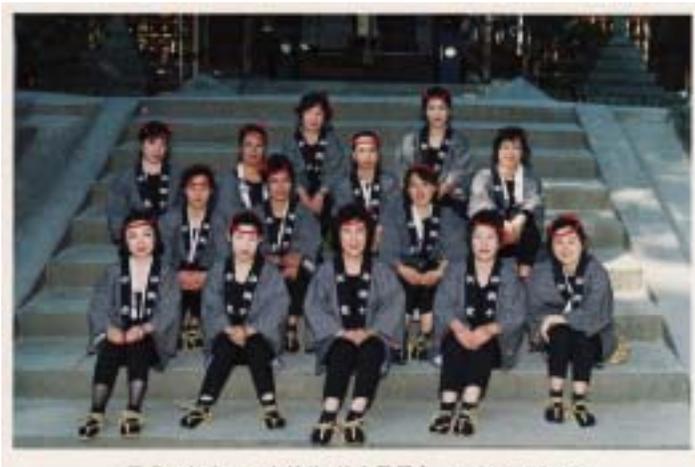
八大神社下二氏子会
女衆誕生二十年誌

女衆 八大神社下一氏子会女衆誕生二十年誌

目次

巻頭言	下一氏子会女神興衆創立二十周年を迎えて	河島安生	1
ご挨拶	荘厳華麗	女神興衆領 松本佳子	2
お祝いの言葉	女衆に拍手	元役員 (N)	3
お祝いの言葉		下一氏子会役員の皆様	4
聞き書き	女衆の二十年	女衆の誕生まで	7
写真のページ	粹にいなせに	女衆の二十年	8
聞き書き	女衆の二十年	女衆二十年のあゆみ	10
神興方女衆から	わたしと女衆		15
編集後記	二十周年記念誌の編集を終えて	女神興同心一同	17

表紙作成協力：永田 豊次(男神興同心)
本文レイアウト：中崎 路子(女衆)



平成三年 神幸祭

下一氏子会女神輿衆創立二十周年を迎えて

下一氏子会総代 河島 安生

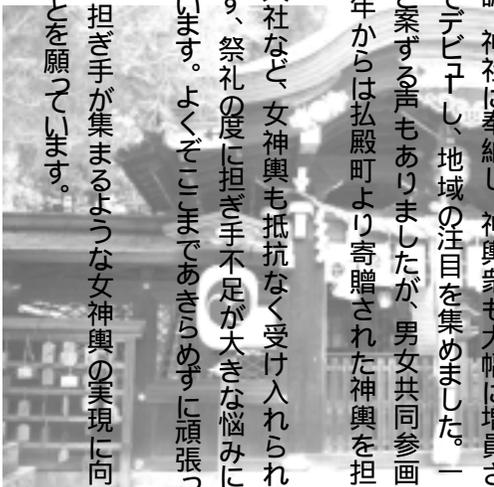
昭和五年、人口もそれほど多くなかった時代、下一乗寺地域には今のような氏子会組織はなく、現上一乗寺氏子会の組織下にありました。地域巡行もなく、その寂しさを嘆いた故西村隆助 故兵庫三千雄氏等が奔走され、有志からの寄進を基に小型神輿（現在の子ども神輿）を新調し、祭礼巡行を始められたことが下一乗寺氏子会の始まりです。地域住民達も大変喜び、若者達の氣勢も大いに上がりました。このような先駆者の努力が地域の絆づくりに大きく貢献したことは、大変意義深いと言えます。その後、敬神の念篤い有志に引き継がれ、現在まで絶えることなく八大神社の祭礼には、下一乗寺地域を祭礼巡行してまいりました。

時代とともに地域の人口も増え、昭和五十五年には若中組が誕生し、これまでの有志組織から全町内会を含む現在の形となりました。祭礼の役職者名も時代呼称となり、同時に祭礼衣装も一新し、現在のような下一乗寺氏子会の形が出来上がりました。

昭和六十二年十月、氏子衆の意気を感じた地域の方々の寄付を頂き、大型神輿を新調、神社に奉納し、神輿衆も大幅に増員されました。同時に、十五名の女衆が誕生し、翌年神輿方女衆として参加、祭礼の華としてデビューし、地域の注目を集めました。一方で、それまで女性が祭礼の表方として参加したことはなく、時代の流れとは言え、つかと柔ずる声もありましたが、男女共同参画といった時代背景もあり、神社の了解の下にその地位を確立して今に至っています。平成十年からは弘殿町より寄贈された神輿を担ぎ、今では、女神輿衆として下一乗寺氏子会になくはない存在になっています。

ここに至るまでには、さまざまな困難もありました。今では、大阪天神祭や京都松尾大社など、女神輿も抵抗なく受け入れられますが、当初は何かと障害もありました。氏子会の花形と言われながらも参加者は増えず、祭礼の度に担ぎ手不足が大きな悩みになっていましたが、挫けることなく皆様が協力してよく乗り越えてきたことが今に繋がっています。よくぞここまであきらめずに頑張ってきたものの、初代の女衆の皆様の努力に敬意を表します。

これからは下一氏子会の花形としてだけでなく、地域氏子はもとより京都市全域から担ぎ手が集まるような女神輿の実現に向けて、組織を挙げて大きく飛躍させ、地域の女性皆が参加したい部所として確立されることを願っています。



莊嚴華麗

八大神社下一氏子会神輿方女衆誕生二十周年にあたり、女衆発足当時より携わらせて頂いております。一言ご挨拶させていただきます。

私が誇りに思っております八大神社は、北の八坂神社(祇園さん)と称され、一乗寺住民の氏神(産土神)「つぶすながみ」として崇められてきました。平成五年(一九九三年)、建都二二〇〇年には八大神社御鎮座七〇〇年を迎えられました。

下一乗寺氏子会は、昭和五十五年に創立五十周年を迎えました。その永き歴史と伝統を支え、現在に受け継いでこられた歴代の役員と諸先輩に支えられ、現在私達女衆は、知識不足ながら、毎年五月五日の大祭には御神幸巡行させて頂いております。

神輿方女衆は、平成元年、当時の役員の方々の発案により発足しました。初めは何も解らず、皆で試行錯誤しいろいろ努力しながら今日までやっております。これまで温かい励ましの声も有れば悪評も有り、時には悲しいくやししい思いをすることもりましたが、今では若い女衆も増えました。

「ここまで来られたのも皆々様のお力添えのおかげ」と深く感謝致しております。ありがとうございます。これからも神輿方女衆の基本である「莊嚴華麗」「けんしゅく」、おそそか気高く(上品)、華やかで美しさを大切に守り、氏子会の意志を次代の女衆に伝承していき、皆さんから参加したいと思われる魅力ある神輿方女衆であるよう、努力向上して参りたいと思っております。

今後共、どうぞ皆様方の指導、ご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

女神輿宰領 松本 佳子

平成 12 年神幸祭



女衆に拍手

元役員 (N)

金色に輝く神輿三基が、五月の空に萌える新緑を映して、宮本武蔵と吉岡一門との決闘の地、下り松より最後の急坂をワッショイワッショイの掛け声に乗せられ、八大神社本殿を目指す。懸命に神輿を担ぎ駆け登る男衆(若中組)は、生成りの絆纏に白いワッショイ草鞋。女衆は濃いつレ地に細かい菱形模様、黒襟の半纏に股引、髪を赤の組紐でアップに束ね、そして草鞋履きの出で立ちは巡行に華を添える。

私は、二十年前、東京の三社祭等で男衆と一緒に神輿を担いでいる粋な女衆を念頭に置き、下一乗寺氏子会にも女衆の参加を提案しました。多少の異論も有りました。関係者各位も、初めてのことでもあり、想像がつかなかったように思われます。他地域で見かける半纏とバツ姿の女性が神輿を担ぎ商店街を練り歩く様子を思い浮かべられたと思います。

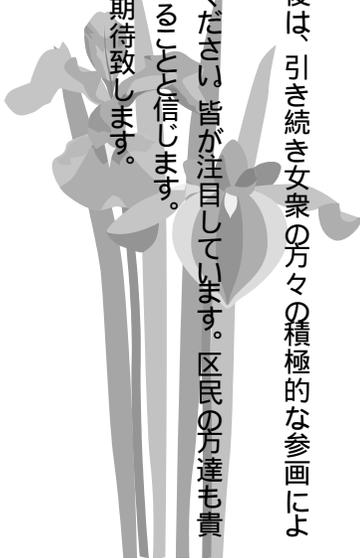
仮に女衆が出来たとしても何年続くかと考えると、少々自信が揺らぎましたが、どうしても女衆を結成させたいとの一念で、知り合いの奥様方に相談しました。中学生、高校生の方が良いのではないかと意見も有りましたが、最初は、若中組の神輿の横で掛け声を掛け、氣勢を上げて欲しいとお願いしました。何分にも初めてのことで戸惑いもあり、躊躇されていましたが、地域氏子会のためならばと賛同頂きました。

これらの女性の方々のお力添えにより、女衆誕生二十年の礎が出来ました。その後は、引き続き女衆の方々の積極的な参画により築き上げられています。

既に舞台の上に上がりました。堂々と照れることなく威儀をもつて祭に参加してください。皆が注目しています。区民の方達も貴女達の威勢の良さを自分に置き換え心援して居ます。忘れ得ない思い出として生涯残ることを信じます。

今後は、氏子会役員、若中の方々の協力の下、より磨きの掛かった女衆への成長を期待致します。

女衆、皆様の健康とお幸せを祈念申し上げ、乾杯。



女衆の神輿は祭の華

総司 徳田 正之

女衆による女神輿創設二十周年おめでとうござります。発足当初より、いろいろな面で「苦労があったかと存じます。今では若い方達の後継者もでき、定着して参りました。地域の皆様方も、五月五日の祭礼において、女神輿の巡行を心待ちにされているようです。

今回二十周年を迎えることが出来ましたのは、役員の皆様方の「尽力もさることながら、発起人として、衣裳等細部にわたる考案され、指導頂きました。元総司の西村様のお骨折りのおかげであると、感謝の気持ちでいえます。

女衆の神輿は、お祭の華です。これからも皆で、お祭を楽しみながら大きな環を拡げて、地域の皆さんに夢をあげて下さい。今後益々の発展を期待しております。



祝 八大神社下一氏子会女衆創立二十周年

勸進役 三浦 正

八大神社下一氏子会女衆創立二十周年心からお慶び申し上げます。女神輿創設当初より今日まで神輿の担ぎ手をまとめてこられた役員の皆様、大変「苦労様でした。

女衆も輿様方が中心で、思えば当初は男衆の冷やかしゃ沿道の人々の声援に少々戸惑いやテレがあったようですが、五年十年と時が経つにつれ、女神輿は今や祭礼巡行になくはならない存在となりました。

町の行政や運営を受け持つ町内会とは別に、祭りを執行するための母体組織を町から独立させる必要からつくられたのが下一氏子会です。八大神社の祭礼は、三基の神輿に御霊代を遷し、「祭神が御旅所へ渡御して」とどまり、氏子区域を巡行して本社に戻る大切な神事です。巡行には稚児、祭具持、年寄、諸役と男神輿、女神輿、子供神輿といった老若男女多くの氏子が参加して、皆で盛り上げるお祭です。

これからも伝統を守りつつ、新しい感覚でお祭を執行して、女衆の粋な姿を見せてください。

神輿方女衆がんばってきた二十年バザイ

頭取 谷本 政治

二十六ヶ町で浄財を募り神輿倉を新設したのに伴い、昭和六十三年秋(十一月三日)に大型神輿を導入しました。翌平成元年からは神輿方女衆が誕生し、お祭り方もにぎやかに、華やかな掛け声とともに宵宮、神幸祭が執り行われようになりました。

お神輿の組み立ても、最初は男衆で組み立てていましたが、最近では女衆も参加するようになりました。ただ、飾り口ブは力が必要なので、男衆が編んでいます。

最初の五年ぐらいは女衆も男衆に混じり、大型神輿と一緒に担いでいましたが、払殿町の神輿が下一氏子会に寄贈されてからは、女衆独自の神輿ができ、今日に至っています。

粹でいなせな女衆、高野交差点に出た時などは、ムジ姿に頭は赤の組みひも、足元は草鞋姿で揃い、大変綺麗で見栄えがしました。

当初より女衆増員に苦勞された役員さん、今は若い方も多く参加され、だいぶ若返ってきて先が楽しみです。これからも大勢の女衆に参加してもらい、下一乗寺氏子会の祭を盛り上げてください。



揃いのわらじ

がんばれ女衆!

若中組神輿会奉行 矢筒 信義

女衆創立二十周年おめでとうございます。

皆さんもご存じの通り、日本文化の中心京都で、女神輿があるのは八大神社下一乗寺を含め数基だと思います。貴重な存在である女衆と発足からの二十年を共有できたことを誇りに思っています。

当初は男衆の担ぎ手と、現在の子ども神輿、男神輿と一緒に担いでいましたね。男と肩が合わず大変苦勞されていましたが、威勢のいい華やかな掛け声で盛り立ててくれました。男の担ぎ手は女衆がおられたからこそキツイ場面も乗り越えられたと思っております。将来機会があれば、また男神輿と一緒に担ぎたいですね。

平成十年からは女神輿として独立され、男神輿同様担ぎ手確保で大変苦勞されたことと推察しております。これからも神輿をきっかけに地域内外を問わず人との繋がりをもち、若い担ぎ手を巻き込みながら次世代に伝承し、楽しいお祭にしましょう。

最後に、男神輿とともに下一乗寺女神輿(女衆)として、益々の団結と発展を心より祈念いたします。

晴れやかに祭を盛り上げて

神輿宰領 高木 勝美

女衆創設二十周年おめでとうございます。

毎年祭を晴れやかに盛り上げてくださる女衆。女神輿あつてこそ祭です。これからも楽しく神輿をかついでください。

祭りの盛り上げ役 女衆

神輿同心 一同

女神輿衆の皆さん、二十周年おめでとうございます。

以前は男神輿と一緒に担いでいたのが、懐かしく思われます。われわれ神輿を担いでいる人間は、神輿は祭の花だと思っております。女神輿衆の方たちは、それをもっと盛り上げてくれる存在です。男神輿、女神輿の練り廻し、それに加えて子ども神輿も、子どもたちが担いでの練り回しを一緒にやってみたいものです。

次世代の若い担ぎ手もたくさん入ってもらい育成していただきたいと思います。これからも、威勢よく、元気に、みんなで祭を盛り上げていきますよ。

塩田聡一、谷向修、田丸和彦、永田豊次、榎本卓史

楽しく参加できる女神輿に

子ども神輿宰領 渡辺 武民

神輿方女衆の皆さん、毎年ご苦労様です。重い神輿を担いで一日中歩いて、足が棒のようになると思います。

最近、地域の行事に参加する人が少なくなってきた、神輿を担いでくれる人が少なくなつたと聞いています。私が見ているかぎりでは、楽しそうに見えるのですが、担ぐ人の数が多かつたり少なかつたりのようです。また、背の高い人と低い人のバランスがうまくいっていないとも聞いています。休憩時間は十分なんですよ。

どうしたら皆さんに気持ちよくお祭に参加していただくことができるのか、考える時がきているのではないのでしょうか。皆さんが楽しく参加できることを、心より願っています。



平成 19 年 神幸祭にて

聞き書き 女衆の二十年 女衆の誕生まで

神輿方女衆誕生二〇周年にあたり、女衆の創設と維持 発展に尽力いただいた氏子会役員の方々と創設当時の女衆メンバーに集まっていたとき、神輿方女衆誕生のいきさつやこれまでの出来事など伝えていきたいとや守っていかなければならないことをお話しただきました。

下二氏子会の誕生

昔は、下一乗寺と呼ばれていた修二地域にも上一乗寺の鉾鉾が回ってきていました。上一乗寺には宮座と二つ制度があり、地域の若者が祭事に関わっていました。下一乗寺からは大人二人が宮に参るくらいでした。

下一乗寺地域には友禅工場が多く、その親方たちが中心となって昭和五年に神輿 現在の子ども神輿が作られ、下一乗寺氏子会が発足しました。祭が好きだといつ一念からスタートした下二氏子会でしたが、当時は役職もまだきつりとしてき上がっていない状態でした。

大型神輿の登場

昭和五十年頃には、もともとは子どもたちが担いでいた神輿を大人が担ぐようになっています。そこで、新しく神輿を作ろうという機運が高まってきました。子ども神輿と同じようなものでは意味がないので、地域から寄付を募り、大きな神輿を新

調して、昭和六十二年、八大神社に奉納しました。それが現在の男神輿です。

女衆の創設へ

女衆を発案したのは、当時下二氏子会の役員を務めていた川岸さんと西村さんでした。西村さんは、下一乗寺の地域に住んでいる。祭りが好きで、にぎやかに地域のためにがんばる人に女衆になつてもらいたい男と女が一緒に一つの神輿を担ぐことを考えていました。



(10ページに続きます)

絆に いなせに —女衆の二十年—



20年間現役です！



平成元年
女衆誕生



女神輿同心務めております。



平成2年の女衆
鉢巻ちょっと太めです



20周年です！



♡母娘で女衆♡

平成6年
子供神輿を担いで高野へ





宵宮です。明日はもっと決めてきます。



今年も担ぎきりました。大満足。



平成 11 年女神輿巡行

長年女神輿を盛り立ててくださった鍵田さん。これからもよろしくお願ひします

平成 13 年 10 月 28 日
京都まつり



女神輿初体験。ちょっとお疲れ？



平成 19 年
高野交差点練り回し

丸抜き写真は平成 20 年祭礼にて撮影

聞き書き 女衆の二十年 二十年の歩み

女衆の誕生

下二氏子会の中では女衆を作るのは無理だろうと、いつ意見が大勢で、賛成する人はほとんどありませんでした。最初の女衆メンバーになった女性たちにはやってくれるかと声をかけたときもはつきりした返事はなく、お願いしてしつじぶ受けてもらったような状態でした。

西村さんから女衆をつくりたいと聞いて、女神輿の衣装というたら、短パンツをはかなあかんと思ひ、絶対いややと思つた。恥ずかしいし、そんなことようしませんと答えたので、西村さんももう言わへんやろうと思つていたら、真顔で、松本さん、高畠さん、小川さんに世話役になってくれと言つてきはつた。

最初は、互いに譲り合つていたけど、そのうちに、ちよつと考へてみいひんか、やつてみよかということになつた。

若い人ばかりでなく、年増の魅力というか、お母さんも入れてほしい、ギャル神輿ではなく、品がある女衆にしたいと西村さんは言つてはつた。

まずは、人を集めないとかかんけど、人数は二〇人くらいいるやるか、誰に声かけたらええやるかと、人の集め方も手探り状態やつた。

自分らの周りの知り合いに声をかけたけど、意外な人もでくれはつた。

そんなもんようせんと言つていた人にも、衣装合わせのときに来てもらつて、そこで頼み込んで参加してもらつた人もあつた。



平成元年神幸祭 女衆デビュー

女衆の衣装

衣装を考へる必要がありましたが、予算は一〇万円しかあ

りませんでした。女衆の当初のメンバーの小川さんが探してくれた江戸佃島、三社祭りの資料を参考に、祇園の呉服屋さんに知り合いを頼って相談に行きました。

こんな衣装を着る祭は京都にはないと言われましたが、「いなせな」衣装をと考え、木綿の黒襟のハッピとし、まずは一五着作成しました。衣装の下には黒の股引、足元は黒足袋に草鞋とし、鉢巻を締めてもらうことになりました。また、女性は化粧直しをする必要があるからと、八坂の下河原でいろいろなかわい絵のあるボンネットを買い集めました。

とりあえず試着してもらい女衆にはしぶしぶ承知してもらいました。

ハッピの下は黒のインナーにしようと思ったけど、ハッピの着方もわからへんで東映の撮影所に聞きに行ったりもした。

頭はどうしようか、髪はアップがいいなあと考えて、鉢巻をすることにした。鉢巻は、豆絞りはどうやとかいろんな意見があったけど、色は赤しかない。帯締めを解いたり、いろいろ試して今の形になった。

口紅も真赤に塗った。

ハッピもとりあえず出来たものを着たので長すぎた



平成 16 年神幸祭 西村幸雄さんを囲ん

し、糊が効いてゴワゴワの袴みたいやった。股引はお手洗いに行った時が大変やった。その度にかから着付けし直さなければならぬので、だんだんスパッツをはくようになった。

二〇年もたつと色があせてきているが、年季の入ったハッピもいいもんや。

女衆の定着

祭礼の初回は、女衆にも照れくささがあったようですが、二回、三回と重ねるうちに気持ちが入ってきて、片肌を脱いで担いだりもするようになりました。

男衆と同じ神輿と一緒に担いでいた頃は、終えてから胴上げしてもらったこともあった。一体感があ

った。最初は男女一緒にひとつの神輿を担ぎ、高野の交差点のときだけ、子ども神輿を担がせてもらった。その重みに満足感があ

った。平成二年には、雨の中神輿を担いだ。二〇年の中で雨に降られたのはその一回だけだった。



平成元年神幸祭 男衆と一緒に神輿を担ぐ

女神輿の誕生

平成十年から払殿町の神輿を預かることになり、女の神輿が

できました。平成十三年十月に開催された京都まつりには男神輿と女神輿がともに参加し、御池通りを北と南に幾度も神輿を練つて、見物の方々とともにお祭を楽しみました。

最近、女神輿も様々な地域で行われているようですが、車に乗せて、目立つところのみ担ぐ女神輿が多く、地域全てを担いで廻る女神輿は珍しいようです。

はじめて女衆が女神輿を担ぎきったときは、上一乗寺の人たちや宮司さんたちも驚かれたと思う。女性が全ての道中を担ぐ神輿は、下一乗寺くらいしかない。

十五、六人で担いでいると男の人が助けにきてくれた。話しながら担ぐのも楽しかった。

神輿で地域を回るとお年寄りがおがんでくれる。手を合わせてくれる。神輿を担ぐ力が湧いてくる。

京都まつりに男神輿と出たときは、子ども神輿を担いだ子ども神輿はきらきらしてきれいだった。

日常は家庭のことがあわただしいけれど、祭になると前の晩から段取りして祭に集中し、祭に血が騒ぐ。

以前は、子ども達も興味を示さなかったけど、今は孫と観にきてくれる。

支えあつて支えられて

神輿を担ぐときは、体を倒して神輿を内に押すような気持ちで両方から担ぎます。すると体に負担がかかりにくく、神輿が上下に揺れて飾りの鈴が鳴り華やかです。神輿を担ぐのは、みんなで力をあわせてひとつのことを成し遂げる喜びがあります。

女衆だけではできないことのひとつに、神輿の組み立てがあります。組み立てには縄を使いますが、女性の力だけではしっかりと締めることができません、やはり男性の力が必要です。また、女衆は草鞋を履くのですが、これも神輿を担いで一日の行程をほどこけることなく、足に吸い付くように履くことは難しく、先輩方に助けていただいています。鍵田さんには長い間女神輿の巡行をリードしていただいています。神輿を担ぎきたときの満足感、爽快感も、多くの方に支えられてのことと感謝しています。

一れからの女神輿

女衆も皆歳をとっていくので、毎年新しいメンバーを増やし育てていかなければなりません。信念を持って、杖をついても神輿を担ぎたいというほどの意志、意地、気迫、心意気ある人が女衆を支えていくことが必要です。

母親が女衆として神輿を担いでいる姿は、子どもたちの印象に強く残るでしょう。また、女衆はこの地域の中で友だちを作

る場としても大切なものです。

外国の方が参加してくれたこともありましたが、国際色が出てよかったし、外国の方も風情を楽しんでくれたと思います。

今後は、次の世代につなげていく必要がある。お神輿は担がなくても、周りで盛り上げていくことも神輿を引き立たせる。

地元の方が地域のことを考えて参加してほしい。

外国の方が入るのもいいなあ。楽しんでもらえたらいい。

下一乗寺地域の女性が心と力を一つに合わせ、地域の安寧と発展を祈つて担ぐ女神輿が、これからもずっと祭礼の華であり続けることができますよう女衆みんなで頑張ってください。

二〇〇八年一月二五日及び三月十八日

お 話 西村幸雄、徳田正之、松本佳子、高畠トシ子、

小川かず子、豊田満子、河村悦子、久保律子

聞き取り 江口富樹、青柳紀子、阪本訓子

女衆二十年、おめでとついでいます。

初めのつちは恥ずかしいやらみこしの重さが肩にくい込むやら、こんなことで一日中廻って行けるのかなと不安だったのは私だけでしょつか？

町内を歩いていくうち、皆さんが拍手で応援し、「苦労さまと声をかけて見送って下さり、勇気と力を頂きました。

昨年は私事で祭りに参加できず、初めて見物人として外から行列を拝ませて頂きました。担ぎ手の姿も足元もまとまって女衆の神輿はとても美しかったです。人数も今までで一番多かったのではないしょうか。これで何もかもうまくいって、後輩の方々に引き継いでもらえたなと思つたことに涙が止まらなくなりました。氏子会の方々、地域の皆様のご協力あつてのことだと思つて感謝しております。

十八年間で、毎年神輿を担がせていただき楽しかったです。この一日だけは、主婦業も足腰の痛いのも忘れてお祭りに参加できたことは一生の思い出です。大変ありがとついでいます。

今後とも祭礼が発展していきますようお祈り申し上げます。

高島トシ子

平成9年神幸祭にて



当時、女神輿が大変珍しい中、西村様のご熱心な説得に負け仕方なくお受けしたものの、モトモキにワラジと聞き、恥ずかしくて隠れたいほどでした。人数揃えも大変苦労したことを覚えています。頭飾りの赤い帯々も何度となくやり替え、最も美しく目立つ姿にと考えたものです。

あんなにも躊躇していた女衆も、お旅所を出る頃には度胸千両で、可愛く綺麗だったと自負しております。巡行を終える頃には、日焼けも疲れもみんな心地良さに変わり、大変楽しい一時であつたことを思い出します。

永く御尽力下さいました松本佳子様に感謝しますと共に、今後も華やかで品格ある素敵な女衆でありますことを望みます。

小川 かず子

八大神社下一氏子会女衆創立二十周年おめでとついでいます。

今振り返って見ると、最初の頃は男衆の中に一緒に入って担ぎ、全然要領が分からないまま何年か過ごしましたが、また楽しさもありません。

その後、女衆の神輿ができ、みんなで力を合わせて現在に至っています。毎年若い人の参加も増え、華やかさも感じています。

また一年、八大神社の祭りが待ち遠しく喜びを感じています。
豊田 満子

十五人の女衆が、男衆の神輿の担ぎ手の中に、入れていただいたものの肩の高さが合わず、不慣れなことから、足の運びもあぼつかなかった神輿初体験の日。女衆だけの神輿をいただいた時は、不安と喜びの中、肩の皮がむけた痛みより、力を合わせて最後まで無事終えた充実感でいっぱいでした。

毎年、「今年も担ぐんでしょ、がんばってや」の声に後押しされ、ここに二十年を迎えることが出来ましたのも、地域の方々の支え合う心のお陰だと、感謝いたします。

最後に一言。清楚な中にも凛としたところを持ち合わせた女衆の衣装に誇りを感じております。
徳田 裕子

女衆が作られて二十年間。短かったかな。最初の頃を思えば、少人数で恥ずかしいとついたら良いのがわからないでも、祭りが大好きだから出してもらえたのでしょ。男衆の中に入り邪魔をしながらも、女衆で子ども神輿を高野の交差点でアシタてる、それが楽しみで出してもらっていたかな。地域の知らなかった人たちとも知り合い、一年に一度会うのが楽しみに出し

てもらっています。今は年代層も若くなり、これからが楽しみですよ。
河村 悦子

月日が経つのは早いもので、女神輿が出来て二十年。女神輿との出会いは、次男が一年生でお稚児さんに出る年のことでした。

私も付き添いで出ることに
なり、女の人がお神輿を担ぐ姿を見て惚れ惚れと見とれました。その中に友達がいて、来年から担いでみたらと誘われて、女神輿の仲間入りをさせてもらいました。

当時は男の人と一緒に担いでいました。もちろん身長も違うので、足を踏んだり、踏まれたり、時には肩が合わなくてお神輿にぶらさがりながら歩いた記憶があります。

これからの若い世代の女衆の方々に、女神輿を盛り立ててが
んばって欲しいと思います。
お祭り大好き 久保 律子

平成 2 年神幸祭 雨の中神輿を担



女神輿二十周年おめでとございます。一口に二十年と言っても、引き継いでこられるには大変な苦労があつたかと思ひます。

私もこの数年女神輿に参加することによって、地域の一人として素晴らしい体験をさせていただきました。この地域の伝統をずっと引き継いでいくためにもがんばっていきたいと思ひますとともに、これからも女神輿の発展をお祈りいたします。

田村 綾

物心つく前から年に一度のお祭りを楽しみにしていた私にとって、神幸祭での記憶は子供の頃から今に至るまでの懐かしい思い出そのものです。

女衆二十周年といつ記念すべき年に、引き続き神輿衆に参加させていただけることを嬉しく思ひます。

杖谷 知香

私は歩けるようになる前から八大のお祭に参加しています。ずっと黒いスリッパと赤いマキの女神輿の人達を「かっこいい」と思ひながら見ていたら、私もいつの間にか十八歳で赤いマキをしてみました

あれから六年…一回仕事で休んだので、五回目のお神輿です。一つの重い物をみんな力で力を出し合つて運びきる、あの達成感は何にもありません。

女も男も子どもも、地元みんなで盛り上げていける八大神社のお祭りは最高に楽しいです！

福島 めぐみ

平成 18 年神幸祭 新緑の中の女神輿





平成 20 年 5 月 5 日 下一乗寺氏子会 神輿方女衆誕生 20 周年記念

撮影： 修学院中学校 学校長 長者善高先生

二十周年記念誌の編集を終えて

女神輿同心一同

今年の神幸祭は昼からあいにくの雨となりましたが、下一氏子会の皆様方のお力に支えられ、無事に神輿巡行を終えることができました。

今年女衆誕生二十周年を迎えるにあたり、毎年お神輿を担ぐ合間に先輩方から伺っていた、女衆ができた頃の「苦労や女衆の衣装に対する思いなどをまとめた記念の冊子を作成することにいたしました。

冊子の作成に当たって、女衆創設に尽力された皆様方のお話を伺う中で、二十年間変わらない熱い思いを改めてひしひしと感じ、その末端に「なるものとして身の引き締まる思いがいたしました。二十年間の歩みをまとめるという作業は、「女衆」のこれまでの歴史を振り返るだけでなく、これからの私たちが歩むべき道を探る作業でもありました。

時の流れとともに、女衆の顔ぶれも変わっていきますが、先輩方の「女衆」に対する熱い思いは、損なうことなく、しっかりと未来の仲間へ手渡していきたいと願っています。この冊子がその一助となれば本当に嬉しいと存じます。

最後に、本冊子の作成に「理解と協力を賜った皆様方、そして長年にわたって女衆を支えてきてくださったすべての方々に心より御礼を申し上げますとともに、今後とも下一氏子会神輿方女衆の維持・発展にお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

書柳紀子、江口富樹、阪本訓子、松岡敏子

「女衆 八大神社下一氏子会女衆誕生二十年誌」

発行日：平成二〇年六月一日

編集：女衆誕生二十年誌編集委員会

祭